

聖書：ローマ 3：9～20

説教題：義人はいない

日時：2015年5月31日

本日の箇所は、ローマ書本論の第一区分における最後の部分です。パウロは1章18節から本論に入り、まず語って来たのは人間の罪の現実でした。9節にあるように、パウロが述べて来たことは、ユダヤ人もギリシャ人も、すべての人が罪の下にあるということです。最初に彼が取り上げたのは異邦人の罪です(1章18～32節)。そこで言われたことは次のようなことでした。神はこの世界の被造物すべてを通してご自身こそ創造者であることを啓示しているのに、人々はそれをばかみ、否定し、退けている内に、その知性が暗くなった。そして偶像礼拝へと進み、性的に倒錯した状態に落ち込み、様々な社会的悪を行なうようになった。人々は自分たちのしたいように生きていっているかもしれません。しかし現実には神が特別な守りの手を離して、彼らを行くがままにさせているということでした。まるで綱につながれた獰猛な犬が、綱から解き放たされて、オレ様は今や自由だ！と喜びの声を上げながらあちこちに突進し、問題を起こすように、人間も欲望のままにあらゆる悪へと進み、そこから引き返せなくなり、その結果としての不幸と災いを自らに刈り取っている。そこにおいて神の怒りとさばきが示されているということでした。

そしてパウロは2章1節からユダヤ人の罪を取り上げました。ユダヤ人は異邦人が断罪される話を聞いて喜んだかもしれません。しかしパウロは同じことを行なっているあなたが神のさばきを免れるとでも思っているのですかと問いました。確かにユダヤ人にはたくさんの特権が与えられました。律法が与えられました。割礼も与えられました。しかしそれがあるからさばかれないのではない。実質的に異邦人と同じ罪を犯しているなら、同じようにさばかれること、むしろ多くの特権にあずかっている分、より厳しい報いを受けることについて述べました。

パウロは3章9節で、ではどうなのか、我々ユダヤ人は他の者(すなわち異邦人)にまざっているのか、と問います。そして、決してそうでない！と答えます。そして結論として、ユダヤ人もギリシャ人も、すべての人が罪の下にあると述べています。「罪の下にある」とは罪の支配下にあるということです。すなわち人間はみな罪の虜となっている。罪の奴隷となっている。罪のパワーにがっちり縛られ、そこから抜け出せない悲惨の内にあるということです。

パウロはこのことを10節以降では旧約聖書から引用して証明しています。これによって自分が語って来たことは独り善がりの見解ではないこと、聖書そのもののメッセージと一致することを示します。ここにはたくさん旧約の御言葉が引用されていますが、これはランダムに引っ張って来たものではなく、良く考えた上で引用されてい

ます。10～18節までの引用聖句は大きく三つに分けて考えることができます。

まず一つ目の塊は10～12節です。ここで言われていることは、「義人はいない、ひとりもない」ということです。すなわち罪の普遍性です。神に良しと認められる人は一人もいない。例外はない。とにかくここでは「いない」「いない」「いない」「いない」と繰り返し強調されています。私たちはこの「義人はいない、ひとりもない」という聖書の言葉をどのように聞くでしょうか。もちろんまず大事ななのは、私が神の前でどうなのかということです。私は神の前に義と認められうる者なのか。しかしこの御言葉は示します。あなたが義と認められないばかりか、世界には一人としてそのように認められる人はいない。誰も神の前には合格しない。どんなに私たちの目から見て素晴らしいと思われる人でも、神の前ではさばかれるべき罪人として断罪される。私だけでなく、私よりもっと上にいると思われる人もそうなのです。ならば到底この私は神の前に義と認めてもらえるはずがない！

ある人はこのような聖書のメッセージに抵抗するかもしれません。そして私は自分を罪人であるとはどうしても感じないと言うかもしれません。もしそう思う人がいるとしたら、それはその人の「義」についての考えがどこか違っているからです。「義」とは神の前に全く責められるところのない状態を指します。神の御心に全くかなっている状態、神の命令から少しも逸脱せずに歩んでいるきよい状態のことです。私たちが勝手に「この辺で良いのではないか」と定めた義ではなく、神の基準に従った義です。本来人間はそれに従って歩むことのできる者として造られましたし、またそのように歩むようにと命じられています。その基準に照らして、全くこれをクリヤーしていなければ神に良しと認めてもらうことはできません。そういう人は世界のどこを探してみても一人もいないと言われています。また悟りのある人もいない。神を求める人もいない。むしろ12節にあるように、すべての人が迷い出てしまった。本来あるべき道から外れておのおの自分勝手な道へ進んで行った。その結果、本来の目的に沿って生きていないのですから、無益な者になった。的が外れているため、結局は本当に意味のある人生、価値のある人生を送ることができない。最後にもう一度、「善を行なう人はいない、ひとりもない」と繰り返されています。

二つ目の塊は13～17節です。ここでは罪の具体的な現れが述べられています。まず前半の13～14節は言葉に現れる罪です。ヤコブの手紙3章8節：「しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。」イエス様も「心に満ちていることを口が話すのです。」と言われました。私たちの言葉は、私たちの内側がどういう状態であるかを端的に示すものです。13節に「彼らののは、開いた墓であり」とあります。死人が葬られた墓、特に当時の土葬された墓が開いたらどうでしょうか。腐った死体が見え、悪臭を放ち、それは言葉にできない恐ろしい状況でしょう。見たくないものが見えて来ます。まさに

私たちののどはそのようなもの。先ほどのヤコブの手紙の言葉の続きには「賛美とのろいが同じ口から出て来る」とあります。私たちは良い言葉も自分の口から出すかもしれませんが、同じ口からすぐ呪いの言葉が出て来る。ここで引用された聖句の中にも、「欺く」とか「毒があり」とか「呪いと苦さで満ちている」とあります。私たちの口はどうでしょうか。そこから人の悪口、批判、陰口、噂話、中傷がすぐに出て来ないでしょうか。それは私たちの内側がそれらで満ちていることを示しています。私たちが罪の下にあることを示すのです。

後半の 15～17 節は行ないに現れる罪です。「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲慘がある。また、彼らは平和の道を知らない。」今日何とすぐに人の血を流す流血事件が頻発していることでしょうか。また多くのところに破壊と悲慘があることでしょうか。また平和とは反対の多くの戦争が起こっていることでしょうか。しかし国レベルの話だけではなく、私たちの日々の生活でもそうではないでしょうか。私は人の血は流していないと言うかもしれませんが。しかしこれは実際に血を流したかどうかという以上に、すぐに争いを始めやすい私たちの状態を表しています。私たちはすぐに人と争っていないでしょうか。それによって様々な人間関係や、これまで築き上げられて来たものを破壊し、悲慘をもたらしていないでしょうか。そして平和のない状態を作ってしまったのでしょうか。

この 13～17 節は、私たちの「全的墮落」を指し示しているみことばでもあります。ここでは様々な器官があげられています。のど、舌、くちびる、口、足、目。全的墮落は時々そう誤解されていますが、人間が考え得る最悪の状態になっているという意味ではありません。これは人間のあらゆる部分が罪の深刻な影響を受けているということです。たとえばコップの水に毒を少量でも滴り落としたりしたらどうなるでしょうか。それは全部に行き渡ります。もうそのコップの水は飲めません。全体が汚染されています。そのように私たちの存在において罪の汚染を免れている部分は少しもないということです。ありとあらゆるところに罪の力が現れる。あらゆる行為にしっかりと罪の力が息づいている。まさに罪の下に私たちはあるということです。

三つ目の塊は 18 節です。「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」「神を恐れること」こそ信仰の核心です。しかし人間は目の前に神を見ない。私たちの思いのすべてから神を締め出している。神を毎日の生活で目の前に置かず、ただ自分のしたいように生活している。本来はウェストミンスター小教理問答問 1 が述べますように神の栄光を現わし、神を喜び楽しむという神中心の生き方に人間の基本があり、幸いがあるのに、その神を私たちの考えと生活のすべてから追い出してしまっている。これが不敬虔のエッセンスです。

さてパウロはいよいよ 19～20 節で、これまでのまとめを述べます。ここにこれまでの御言葉を見て来た私たちが示すべき反応のことが書かれています。それは「すべて

の口がふさがれて、神のさばきに服する」ということです。19 節に「律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われている」とありますが、ここの「律法の下にある人々」とは、具体的にはユダヤ人のことを指していると思われる。パウロがこれまで論じて来たことは、異邦人が罪の下にあるのは論ずるまでもないこととしても、ユダヤ人もまた罪の下にあるということです。ユダヤ人も律法の前では異邦人と同様、口をつぐまざるを得ないということです。なぜそうであるのかの理由が 20 節です。すなわち律法を行なうことによっては誰一人神の前に義と認められないから。もちろん、もし律法を完全に守れたら神に良しと認められます。しかしユダヤ人も異邦人も罪の下にあって、律法を神の御心通りに行なうことができない。むしろ律法によっては罪の意識が生じるだけです。これが律法に接した者の正しい結果なのです。またこれが、神が私たちに律法を与えた第一の目的なのです。

ですからもしこの律法に接しながら、罪の意識を持たず、口をつぐまず、反対に雄弁にしゃべるなら、その人は正しく律法に接していないことになります。その一つの例はルカ 18 章にあるパリサイ人と取税人の祈りのたとえにおけるパリサイ人です。彼は言いました。「神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」彼は口をつぐむどころか、自分がいかにあれやこれやの戒めを守っているか、誇りつつしゃべっています。あるいはイエス様のところに、どうしたら永遠の命を自分のものにすることができるかと尋ねて来た金持ちの青年もそうです。イエス様に、律法の戒めを守りなさいと言われた時、彼は言いました。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。」これに対して、正しい反応をした人の例として、どんな記事をあげられるでしょう。それはヨブ記におけるヨブです。ヨブはそれまである意味で雄弁に主と論じましたが、ついに 40 章でこう言いました。「ああ、私はつまらない者です。あなたに何と口答えできましょう。私はただ手を口に当てるばかりです。一度、私は語りましたが、もう口答えしません。二度と、私は繰り返しません。」律法を通して神を正しく仰ぎ見た人はこのようになるのです。手を口に当ててもはや黙るしかない。自らの罪深さを悟り、何の言い訳もできないこと、何の弁解もできないことを悟り、首をうなだれて、ただ神のさばきに服するしかない。

私たちはどうでしょうか。聖書の戒めの前で口をふさがれる者でしょうか。口をつぐむ者でしょうか。もし私たちが律法に接しながら、なお平気で何かをしゃべろうとするなら、私たちは律法に正しく接していないということです。大切なことは、神の律法の前で口をつぐまされることです。しゃべる言葉を持たないことです。自分さばきに値する者であることに観念し、手を口に当て、うなだれることです。しかしその人は幸いです。なぜならそれは、その人が律法の目的に沿って律法に接したことを

意味するからです。聖書を正しく理解したことを意味するからです。そしてそういう者に神は驚くべき救いを用意くださったという福音が次に語られることになる！自分自身を見る限り、どこにも望みがなくて口をつぐんだのに、そんな者に神はイエス・キリストによる義をくださる。1章17節に示されていたように、福音の内に神は私たちは罪人を義としてくださる「神の義」を啓示してくださった。これを受け取って私たちは神に救われることができますのです。そのための道は、この3章19～20節の道を通ることです。神の律法の前で口をつぐませられることです。神の導きを頂いて、私たちがそのように黙する者へと導かれますように。「義人はいない、一人もいない」という聖書のみことばは、確かにこの私に当てはまると深く同意することができますように。この私にはさばき以外にふさわしい報いなしと首を垂れることができますように。その時にその人に救いの光は入って来ることになります。神はそのような者たちを見捨てず、ただイエス・キリストにより頼む信仰を通して、信じるすべての人々を義とする救いの道、福音を備えてくださったからです。